

オピニオン&フォーラム

# スパイ防止法を考える

## 交論

### 安全保障へ情報機能高める必要

「スパイ防止法の話が出てきたのはなぜですか。」  
 「私自身は随分前から秘密保全や機密改竄の重要性を唱えていて、最近になって言い出したわけではありませぬ。いま話題になっているのは、我が国を取り巻く情勢とそれに伴う政治的背景が大きいのでは」といいます。

「外国人の問題や諸外国からの脅威についてのセンシティブな(敏感さ)が高まっているからだと思います。外国人の投資や土地取得の規制など一連の流れで出てくる話でしょう」

「2014年施行の特

元国家安全保障局長・元内閣情報官

北村 滋さん

1956年生まれ。警察庁に入り、2011年に内閣情報官。19年に国家安全保障局長に就き、21年に退官。著書に「情報と国家」「外事警察秘録」「国家安全保障とインテリジェンス」など。

定秘密保護法の制定にも内閣情報官として携わりましたね。この法律では足りないのででしょうか。

「特定秘密を漏らした公務員には厳罰に処することになりますが、漏洩をそのかす、本心に悪意のある人間には、法の要件が厳しすぎて、適用が難しい規定ぶりになっていきます」

「スパイ防止法をつくるのであれば、その部分が大きいということですか。」

「やるのであれば、大きいと思いますね」

「同盟国・同志国のスパイも対象になりますか。」

「特定秘密保護法では、

同盟国との間で、基本的に情報交換が可能です。外国為替及び外国貿易法(外為法)でも輸出手続きを簡略化できる「ホワイト国」という分別があります。法体系は外国をすべて平等に扱っているわけではありませぬ。対象の区分は技術的に解決できると思います」

「外国で日本人が拘束された時、日本でつかまえた外国のスパイを帰国させて取引する「スパイ交換」も考えられますか。」

「国際的には行われていたことです。スパイでなくともペルソナ・ノン・グラータ(好ましからざる人

物)として国外退去にすることは外交的な慣行として行われています。まあ、でもどこまで考えているのかどうか。まだどんな法律になるのかを議論している段階です」

「自民党と日本維新の会の連立合意では、内閣情報官を格上げし、「国家情報局、国家情報局長を創設する」としています」

「内閣官房には政策についての総合調整権はありますが、情報についてはそれに見合うものはありません。今も関係省庁から情報が入っていますが、制度上は情報提供義務がなく、建前上は情報を集約できない仕組みになっていています」

「連立合意には「国家情報局長と国家安全保障局

長を同格にする」ことも盛り込まれました。現状でも内閣情報官と国家安全保障局長が一緒に首相に説明する機会が多いと思います。情報官の格上げが必要なのではないでしょうか。

「私は両方の立場を経験したのでわかりませんが、両者同席はしませんが、両者同席は「聞く立場」で情報官は「情報を渡す」立場です。その前提として、情報官に情報を集約できる制度が必要ですね」

「安保局長が内閣情報官に「こういう情報を」と発信する仕組みは、同格になっても変わらないと。全然変わらない。情報を渡す方が情報を集約する権限がないのがおかしい。単なる組織法上の問題です。だがトップになって情報集約を機能させる制度的安定性の問題なのです」

「連立合意には「対外情報局の創設」も。

「情報監視審査会を設置した際の国会法の付則で、対外情報機関ができた場合は「国会の監視のあり方を検討し、必要な措置を講ずる」としています。権力機

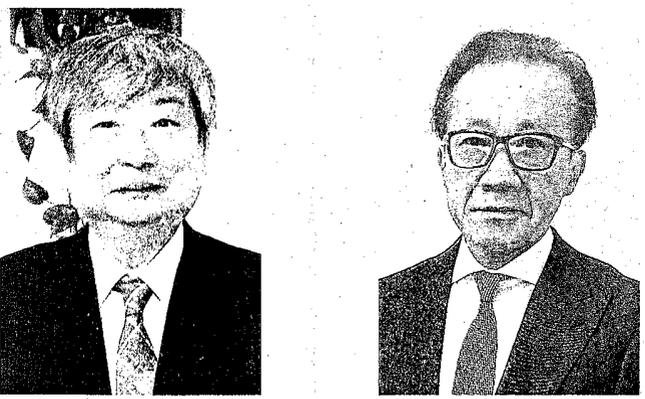
「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」

与党と野党の一部がスパイ防止法の制定に向けた動きを強めている。自民党が1980年代に提案し、「思想・信条の自由を侵すおそれがある」などと批判を受け、廃案になった経緯がある。なぜ今なのか。問題はないのか。賛否の立場が異なる2人の専門家に話を聞いた。



海渡 雄一さん

1955年生まれ。労働事件や原発訴訟などの環境事件、監獄訴訟などの人権事件に携わってきた。日本弁護士連合会事務総長なども務め、現在は秘密保護法対策弁護団共同代表。

「なぜいま、スパイ防止法制定の動きが強まっているとみていますか。」

「1980年代に自民党が提案しながら廃案になったスパイ防止法の大部分は、特定秘密保護法で実現しています。排外主義や外国の脅威をおおる風潮が高まっているこの機を使って、総仕上げとしてこのことをやりたいのではないでしょうか」

「一つが情報機関の設置です。内閣情報調査室を格上げして国家情報局を作るとしており、自民党内で検討が始まりました。対外向けには、海外でのスパイ活

動をする対外情報庁、つまり日本版CIA(米中央情報局)の設置です。自国の情報が漏れることについて厳罰を科す一方、外国から秘密の情報を取る制度を公式に作るようになっています」

「もう一つは、外国代理人登録制度です。外国の利益を代表して活動する人が外国代理人とされ、活動内容や資金の出所などを登録して公開する義務を課し、違反には罰則をかける仕組みです。日本人であっても外国人と一緒に活動しているたら、登録するように適用が拡大しかねません。市民団体でも海外の市民団体と

連携し、資金援助などを受けていると、外国勢力と見なされて監視の対象となることも考えられます」

「参政党の神谷宗憲代表は参院演説で「(公務員の中で)極端な思想の人たちは辞めてもらわないといけない。これを洗い出すのがスパイ防止法です」と訴えています。本音が表れていませんか。」

「特定秘密保護法などでは現在、情報を扱う人たちの身辺調査を国が実施する『セキュリティクリアランス(適性評価)』に思想信条が入っていません

が、思想チェックのようなものを新たに入れるということになりかねません。外国代理人登録制度とあいまって、政府の政策に異論を唱える人に、「スパイ」「非国民」などとレッテルを貼り、その言説を無力化し、人々を萎縮させていくことになりかねません」

「社会から異論を封じ込めかねない、と。」

「予兆はすでにあります。私はSNSでもスパイ防止法に反対だと公言していますが、「スパイ防止法に反対しているおまえはスパイだ」といった書き込みがみられます。非常に怖いですね。絵本作家のやなせたかしさんをモデルにしたNHKの朝の連続テレビ小説『あなばん』のシーン

「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」



### 自民と維新の連立政権合意書のインテリジェンス政策(要旨)

- 26年通常国会で、内閣情報調査室及び内閣情報官を格上げし、「国家情報局」及び「国家情報局長」を創設する
- 27年度末までに独立した対外情報庁(仮称)を創設する
- インテリジェンス・スパイ防止関連法制について25年に検討を開始し、速やかに法案を成立させる

### 異論を封じ 社会萎縮させる恐れ

弁護士

海渡 雄一さん

「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」

「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」

「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」

「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」

「戦時中、出征する主人公が見送られる場面、母親が「生きて帰ってきなさい」と訴えたときの、周囲の反応が印象的でした」

「人混みの中から現れた憲兵が「おまえは反戦主義者か」「非国民め」と叫ぶのです。いままさにそれが始まろうとしているのではないのでしょうか」

「スパイ防止法を廃案に追い込んだ80年代のような危機感が政界にも社会にも薄いように感じます」

「当時は保守政治家の知恵として、情報機関は欲しいけれどもいっただん作ってしまおうと暴走してコントロールがきかなくなるといいます。これはスパイ防止法の本質は、世界を「敵」と「味方」に分し、簡単に逆転してしまう正義を守ろうとするものなわけです」